

## 人としての成長

「高校野球の目標は、甲子園、目的は人間形成」などという言葉聞いたことがある。学校であるのだから、部活動を通じて人として成長してほしいと望むのはある意味当然のことである。

かつて佐藤道輔先生が当時の強豪校による勝利至上主義の時代に「日々の練習の中で「甲子園の心」を育てる」こと、そのための「全員野球」を訴えた。そのために選手たちには「誠実、努力、投資」の心を求めた。つまり、物事に正面から向き合い目標を定め、そのために日々努力すること。困難なことがあっても逃げ出さず、あきらめない心を日々の練習を通じて身に付けてほしいと願った。大島高校や東大和高校での実践は、先生の著書「甲子園の心を求めて」で紹介されており、高校野球の素晴らしさとして多くの読者の心を得た。当時の大島や東大和の部員たちは、この教えを胸に誇りを持って卒業し、その後も心の支えとなっていることを知っている。

そしてその後、多くの指導者がこの本をバイブルとし、現場での指導をしていた。私も高校野球の現場での指導を通じ、彼らの人としての成長の手助けをして、社会に送り出してきたことに誇りを持っていた。

2012年、片倉でベスト4に進出したときのメンバーの野球ノートの最後の文を紹介し、彼らが高校野球部生活から何を学び、成長したと実感しているのかを見てみる。

「自分は高校3年間で別の人間になった。入学した頃は本当にお子様で、人に迷惑ばかりかけていたことを思うと大きな進歩だ。「人は変わろうとすれば変わる」と言われたことを信じている。なりたい。自分になるために努力していきたい。先生に教わったことを人生の教訓として生かしたい。野球が上手くならなかつたけれど、人生を教えられた気がする。自分は無知でバカでどうしようもない人間ですが、できるものなら、いつか先生みたいな人になりたいです」

「1年生の頃は試合をやっても出番はほとんどなく、つまらなくて辞めようと思っていた。夏の大会で2つ上の先輩たちの試合を見ていて気持ちが変わった。くそガキ

だった自分から見て、先輩たちが2年半の野球生活の全てを出し切ったようで本当に格好良かった。自分も先輩みたいになりたいと思った」

「自分は内野から外野にコンバートされ、外野手の4番目、そしてサードコーチャーのポジションをもらった。それでも大会を通じ、3人のレギュラーを支えられたと思っている。出番がなかったことはチームにとっては良いことだと思っている。自分の存在がどうやったらチームに貢献できるかを考えていた。それは楽しいことだった」

「高校入学の頃、みんなに迷惑ばかりかけて今思うとよくここまで野球を続けて来れたと思う。自分の中では2年生の秋にエースナンバーをもらい「こんな自分ではいけない。みんなに信頼されてこそそのエースだ」と思い、この日から自分が変わろうと思った。金井が片倉に来て刺激になり、それで自分を成長できた。このメンバーで、片倉で野球ができて良かったと胸を張って言える。チームがおかしくなったとき、いつも宮本先生の一言があった。その言葉を本当に理解しようとする人が何人いるかで、良いチームにも悪いチームにもなる。自分たちは本気で理解しようとした人が多かったのだと思う」

「入部した頃は何も考えずに野球をやっていた。今は頭が疲れるほど、このカウントで相手は何を考えて何をやってくるのか。どこにバントすれば相手の隙をつけるのかと考えながら野球をやれるようになった。先輩方と一緒に宮本先生の野球が楽しくやれて自分はここまで成長できた」

「準決勝で負けてベンチで泣いている選手もいたが、自分を最後まで笑顔だった。もちろんもっとみんなと練習して決勝に行って甲子園に行きたかった。でも、こんなに長くみんなと野球ができたのだから悔いはない。前の学校で野球を辞めていた時、章が声をかけてくれた時は本当に嬉しかった。片倉に来ていなければ、自分は今頃何をしていたのだろう。途中から来た自分を迎えてくれた仲間たち本当にありがとう。片倉で野球がやれたことは自分にとっての財産で、人として成長することができた」

「今日負けた時、悔しいというよりさっぱりした感じだった。みんな最後までこの試合を勝とうとしていた。そして大会の場に負けている選手がいなかった。最終回の連打はまさにそうだった。「大事な場面でバットを振れるかどうかだ」、いつも先生から言われていることだった。キャプテンの章は本当にいつもチームのことを第一に考えてくれていた。ベスト4で周囲の片倉への視線が変わった。今試合に出ていない選手、順番待ちをしないで自分のアピールポイントを出してくれ。練習をしていけば、日に日に自分が上手くなっていくことがわかり、それはほんとに楽しいことだ。先生の下で野球

がやれて本当に良かったです」

「自分は上手い選手ではなかった。スタートからみんなより遅れていたし、練習試合に出場することもあまりなく何度も辞めたいと思った。それで最後の夏の大会絶対ベンチ入りして野球をすと思って頑張ってきた。最後の夏のメンバー決定間近の練習試合の前に、宮本先生から「今度の試合の2試合目先発で出すからな、頑張れ」と言われたとき、もちろん嬉しかったが「これが最後のチャンスだなあ」と思った。あの日からメンバー発表の日まで本当に野球だけに集中して頑張った。あの頑張りがあったから悔いを残さず引退できた。それ以前にも先生は何度もチャンスくれた。タイムリーやホームランを打つこともあったが、結局ベンチ入りのチャンスをもにすることができなかった。あの時もしチャンスを掴んでいたら、また別の気持ちで今日を迎えていたのかと思うと複雑な気持ちになる。メンバーを外れてから、最初は悔しくて泣きそうになるので、みんなから離れてボールにテープを巻いたりしていた。でも、しばらくするとメンバーのサポートが本気でできるようになった。大会も一緒に戦うことができた」

彼らは高校3年間で自分が変わったことを実感している。過去の自分を素直に反省している。周囲の人に感謝することができるようになった。集団の中で自分の位置を知り、それにふさわしい行動を取ろうとするようになった。勝つという目標のために努力する方法を知った。おそらくこういうことを、野球を通しての人としての成長と言うのかなと思った。この代のチームは最後の夏ベスト4という結果を出したことがこうした思いを持った1つの理由かもしれない。昔、道輔先生が言っていた言葉を思い出した。

「甲子園に出場して選手がダメになっていくのなら、甲子園なんか行かないほうがいい。俺はもし選手たちが甲子園に行ったら、今まで知らない違う世界を知り、もっともっと成長してくれると思っている。だから、選手たちを勝たせたい。甲子園に行かしてやりたいと思っている」

「たとえ予選の1回戦で負けたって、高校3年間の彼らの頑張りを否定するものではない。だから、甲子園の心は日々練習するグラウンドの中から生まれる」

それでもやはり結果が出ると、その頑張りを自ら肯定しやすいし、早く負けてしまうと否定しないまでも全面的に肯定しづらいのかもしれない。